

令和3年度 hug くむ保育園大岩評価書

I 経営の重点に関わる事 評価段階 (A:大変良い B:まあまあ良い C:あまり良くない D:全然良くない)

1. 園教育 (卒園目標): 社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標: 「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標: 「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
重点目標	評価指標	評価	自己評価
社会に出ていく為の基礎ができた子	特定他者との安定した愛着の形成がなされ、内面的安定が図られるよう向き合っている。	今年度は1歳児の入退園が多い年度だった。環境が変化することが多い中で、新入園児だけでなく在園児に対しても、気持ちを受け止めることや園児の感じていることなどをよく考え対応し向き合うことができていた。また、保育者だけでなく調理員も hug くむ保育園大岩の職員の一員として、調理室から子どもの様子を見たり、会話をしたりと穏やかに笑顔で接することができていた。	A
	人や物に関心を示し(気づき)探索活動の範囲を広げられるよう向き合っている。	散歩や室内遊びの中で、子どもたちが「発見!」と言える機会を多く取り入れたり、給食のメニューでも切り方や盛り付け方の工夫をしたりと子どもたちが自ら気づいていけるような環境を整えている。その結果、子どもたちも周りの変化によく気づけるようになった。その気づきを大切にするとより良い保育が提供できると感じた。	B
	探索活動の中での不安・怖れ、あるいは喜び楽しさを受け止め、内面の安定を図れるよう向き合っている。	子どもの表情から不安・恐れ、喜び・楽しさを読み取り、穏やかに対応することができている。無理強いするのではなく、子どもの気持ちに寄り添うよう心掛けたり、子どもたちの心が動きそうなときに見守ったりしていると、子どももしっかり保育者の顔を見て自分の気持ちを伝えようとする姿が見られる。	A
	「～したい」という、自らの考えを持てるよう子どもに向き合い、また子どもの考えをくみ取れるようにしている。(行動しやすいよう促している)	一人ひとりの考えや想いをまずは保育者なりに考え代弁することで、子どもと一緒に考えたり、“～していたら楽しいのでは”と思えるような促しをしたりすることで子どもが行動しやすく「できた」をたくさん味わい自信がもてるような関りができた。保育だけでなく給食中でも「全部食べられた」「おかわりしたい」等の想いをくみ取れるように提供する量や盛り付けの工夫を行っている。保育者一人ひとりが常識やルールに捉われず、子どもの「したい」が叶えられる方法を柔軟に見つけていけるようにしていくことが課題である。	B

	<p>行動によって生じた結果に対し、自己肯定感（自己有能感）を持つ事ができるよう向き合っている。</p>	<p>1・2歳児は成功体験だけでなく、失敗した際にも“どのようにしたら成功するか”を一緒に考えたり、提案したりしてスモールステップを意識し子どもが自己肯定感(自己有能感)を持てるよう関わることができた。0歳児はどんな経験も初めての発見のため、良いことも良くなかったことも、発見できたこと自体はポジティブに捉えられるよう明るく楽しく関わることができた。</p>	A
	<p>お友だちの気持ちに気づけたり、次の行動を見通すことができる促しをしている。</p>	<p>子どもの発達状況に合わせ、お友達の気持ちを代弁したり子ども自身が考えられるような声掛けをしたりするなどして気づけるような促しをしていきたい。また次の行動の見通しを保育者が上手く伝えることができないことが多く、対応が遅くなってしまうことがある。保育者の中には事前に子どもたちに知らせたり、「1～2～」と見通しを持てるような声掛けをしたりと工夫をしている者もいるため、保育者間で方法を共有し学んでいけると良い。</p>	B

2. 保育方針

評価指標	評価	自己評価
<p>根拠に基づく保育を実践します。</p>	<p>1つ1つの行動に意味を持って保育することができていた。今後は疑問に思ったこと、興味のあるところから“意味”をより理論的なものにできると良い。そこから、毎日の活動のねらいの理解を深めていけると子どもたちもより楽しく過ごすことができると感じた。職員との連携も重要視し、学んだことを共有したり一緒に明確化できたりすると良い。</p>	B
<p>子ども自身の発達状況や個性を尊重します。</p>	<p>月齢・年齢の発達の目安と比べて“これができない”ではなく、実際の子どもたちを見て得意を伸ばす、苦手を少しずつ解消する援助をしていけると子どもたちも楽しく過ごすことができ、たくさん成長が見られるようになるのではないかと感じる。また、一人ひとりの成育歴や家庭環境等も子どもが成長していく上で大事なことであるため、意識しながら保育をしていけると良い。</p>	B
<p>子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。</p>	<p>保育者間で、子どもへの声のかけ方を学び合っていると感じた。自分とは違う声のかけ方を見て“そういう見方もあるのだ”と勉強している様子が見られた。保育者の気持ちがいっぱいいっぱいになってしまい、子どもの気持ちを考える余裕がないときもあるが、大人都合で考えるのではなく子どもたちの様子の前後を見たり、会話したりすることで「子どもが今どう感じているのか」「どうしたいのか」を考えていけると良い。</p>	C
<p>子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。</p>	<p>まずは子どもの話を聴くこと、言葉にならない子どもの想いを代弁することを心がけている。ただ聴いたり代弁したりするのではなく、子どもたちが自分で納得できるよう話を聴いたり表情や行動から読み取ったりした上で、共感することや相手の想いにも気づけるような援助も行っていると良い。</p>	B

「いいところ見つけ」を心がけます。	子どもの行動に対して常に肯定的に捉えることで子どもたちの良いところをたくさん見つけられることができた。見つけた子どものいいところを職員や保護者様と共有し、子どもに褒めることや伝えることだけでなく、職員全員で個々の良いところを伸ばし子どもたちの成長に繋げていけると良い。	B
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	子どもたちがどのようにしたら“楽しいか”を常に考えながら保育するよう努めている。ただ単に“楽しい”ではなく、“環境を用意する”“やり方を教える”“自分でやってみて楽しさを見つける”など個々の発達や特性に合わせて様々な援助を考え、そこから意欲に繋げられるような関りを行っている。	A

II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	各々で0歳から3歳までの発達について学び、考えているが職員間で共有出来ていない。職員によっては得意・不得意もあるかと思うので、担任を中心に全職員で考え連続性を考慮した遊びを充実させていけるとより良い保育が提供できると考える。	B
	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるように子どもの想いに寄り添い関わっている。	0歳児は毎日の子どもたちの姿に合わせてリズムを微調整しつつ、かつ少し先の生活にも目を向けていくことができていた。フリー保育士を着けているため、不安な子の気持ちを受け止めゆったりと関わる等寄り添える工夫ができるようになると思い。 また、子どものその日の様子や体調を把握し、給食やおやつ提供からも工夫することができていた。	B
	環境を通して行う保育	子どもの成長につながるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	昨年度と比べ、保育士の体制的な問題で朝の自由保育中の遊びが充実できていなかった。現状の体制でも、子どもたちの発達や成長につながる保育をどのようにしたら行えるか考えていきたい。 食事の面では担任と調理員が連携をとり、にぎる・つまむ・すくう・箸を使う等成長につながるよう大きさを工夫していた。	B

<p>安全管理 ・指導</p>	<p>事故防止・防災</p>	<p>様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作 り、園児にも安全行動を身につける指導をしている。</p>	<p>危機管理に対する想いは職員間で温度差があり“職員全 員”というところに課題が残る。大きな怪我または大きな 怪我に繋がりそうな事故があった際は臨時会議で話し合い 温度差は縮まってきているが、引き続き事故や災害に対 して“どのようにすれば子どもの命を守れるか”を繰り返し 共通認識していきたい。</p>	<p>C</p>
<p>保健管理 ・指導</p>	<p>生命の保持</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安定した生活リズム（睡眠・食事・排泄等）の管理 を行っている ・「おいしく・たのしく・たべる」をテーマに、様々な 形で食に関わる体験ができるよう工夫している。 	<p>子どもが安定したリズムで過ごせるよう、生活リズムの管 理に努めている。</p> <p>食育に関しては、夏にミニトマトの収穫を行ったり遊びの 中で食具を使用した遊びを行ったり、行事食メニューを活 用して視覚でも楽しめるように工夫したりと職員間で話し 合いながら様々なことが経験できた。今後生き物係と担任 が連携をとり、本物の食材に触れる機会を多く取り入れ収 穫だけではなく育てることや収穫後の保育にどのように組 み込んでいけるか考えていけると良い。</p>	<p>B</p>
	<p>健康教育の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の健康状態の把握に努めている ・園児の発育・発達状況の把握に努めている。 ・園児に手洗い・うがい等の生活習慣を身につける指 導をしている。 	<p>健康状態、発達・発育状況の把握に努めている。子ども の生活習慣に関しては十分に行うことができなかった。感染 症が流行しているため、手洗い・うがい・歯磨きは行える ようにしていきたい。その時間を確保するために時間を見 て保育を行うこと、最低限の子どもへの援助ができるよう になると良い。</p>	<p>C</p>
<p>特別支援 教育</p>	<p>支援体制の構築</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が園児一人一人の子どもを理解し、子どもの 関わりに対し共通認識を持ち援助をしている。 ・特別な支援が必要な園児に対応するため、発達障害 や病気、その他の特別な支援について、様々な知識の 研鑽に努めている。 	<p>全職員が共通認識を持ち、援助が出来るように会議内で共 有したり、日誌に記入したりと工夫ができるよう努めてい る。それを実行しているのが全職員ではないというところ が課題である。職員が各々の想いで子どもと関わってしま うと子どもたちが迷ってしまう。そのため同じように援助 ができるよう日誌・日案を活用してだけでなく、職員 全員が保育について発信していけると良い。</p>	<p>C</p>

組織運営	組織体制の充実	園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員間で連携を取り合い、保育を進めている。	“全職員で保育をする”をテーマに今年度は保育を行ってきた。年度初めは連携をとることが難しかったが、次第に朝の隙間時間に保育者間で話をしたり、午睡中に子どもの様子を伝えたりしながら連携が取れてきたように感じる。その反面、保育者間で子どもの姿や認識に相違がないか不安であるという言葉も挙がってきているためその不安が払拭できるように連携していきたい。	B
研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針を実践に活かせる研修ができている。また実践に活かせる具体的な手立てや教材研究を行っている。	今年度も新型コロナウイルス感染症の影響で外部研修を受講する機会が少なく、受講できたのも数名だった。内部研修では事例検討や今年度からはじめたキッズスキルを通して発達や子どもへの援助方法等実践に活かせることを学ぶことができた。学んだことを園の理念・目標・方針に落とし込むことで実践できるようにしていきたい。	B
教育・保育環境の整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	職員や子どもたちが“楽しい”と思えるような保育ができるように保育者間で連携をとるようにしている。さらに良くしていくためには人員や時間が必要となってくる。職員全員が“より良い保育をする”“楽しく保育をする”という意識を持ち、準備や相談に使える時間が増えると良い。	B
家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	家庭環境への支援機能の充実をさせるためには、普段の保護者とのコミュニケーションが大切だと考えている。送迎の際に子どもの可愛いエピソードや成長と一緒に喜べるようなエピソードを伝えていくことで、保護者のご意見・ご相談事を言いやすい関係を築けると良い。	B
連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園に親しみを持って交流する機会を作っている。	新型コロナウイルス感染症の影響により、直接的な交流が昨年度よりも更に減ったように感じる。連携園である安東こども園のご配慮により、1度だけ交流の機会を設けることができた。こちらからもお散歩コースになっていることを活かして連携園まで歩いて行く等どのような交流が可能か考えられると良かった。	C

地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流し、近隣住民との触れ合いに努めている。	今年度より園開放を行ったことで、近隣にお住まいの子育て世帯に hug くむ保育園での保育を見ていただく機会が増えた。4月入園の一次募集が終了してからは参加者が減ってしまったため、入園を検討していただいている方以外にも気軽に遊びに来ていただけるような会にしていきたい。	B
--------	--------------	-----------------------------------	---	----------

III 園としての保育の総括

今年度、社員を中心として“職員全員で保育をする”という体制に変更したところ、前年度と比べ子どもの姿や1日の活動について職員間でコミュニケーションをとることが増えた。評価を見ていると「職員全員が把握する」や「職員全員で作る」がまだまだ課題として残るため、まだ連携の輪に入ってくるできない職員をどのように巻き込むか、どのように「全職員で」というところがクリアできるのかを一人ひとりが意識をして考えていく必要がある。そこができるようになることで、今行っている保育をより良いものにできると考えている。

今年度よりはじめたキッズスキルについてはプラクティショナー・アンバサダーを中心に学ぶ機会を設けた。【まずは職員がキッズスキルを楽しむ】を目標に職員で実践したり会議内で実践したりしながら学んできた結果、キッズスキルがどのようなものなのかを知るために意欲的に学ぶ職員もいた。次年度は子どもたちと一緒に実践することでより深く学び、本格的にキッズスキルを取り入れた保育を行っていきたい。

IV 園としての経営の総括

今年度は職員の不足もあり、3月時点で在園児15名のみとなってしまった。待機児童として枠が空くのを待っていた保護者様や、入所をご検討されていた保護者様に対し大変申し訳ない思いとなる結果だった。職員が不足することで園児を入れることができないのは勿論だが、職員の業務や普段の保育も職員が考えた保育ができない等支障が出ていたように感じる。職員不足で思うような保育ができないということがないように、まずは【離職率0】を目標としたい。“職場の雰囲気をよくする”“業務負担の軽減”をこの2年間行ってきたことで以前より離職率も減少傾向にある。今の職場環境を維持し、より良い職場にしていくための対策を引き続き考えていきたい。

また、今年度より園開放を行ったことで近隣にお住いの保護者様にも hug くむ保育園大岩で子どもたちが普段どのように過ごしているのか、間近で感じていただくことができた。感染症対策として2組限定とさせていただいていたが、より多くの皆様に園の雰囲気を知っていただくために現在使用している SNS を活用する等工夫をしていく必要があると感じた。